

## 烈将・山口多聞少将

日本の敗戦の原因の一つが「人事のミスキャスト」であることはすでに述べた。

「永遠のゼロ」でも、ミッドウェイの、絶対に勝つという布陣を敷きながら、惨めな敗北を喫したのは、「南雲と源田のせいだろうね」というシーンがあったが、もし、炎の提督、あるいは闘魂の提督と呼ばれた山口少将が司令官であったら、陸上用の爆弾を装着していてもただちに敵空母を攻撃していただろう。いちいち魚雷に変更している時間が無駄だからで、その具申さえ無視し、魚雷に付替えるという時間の無駄をしてしまい、珊瑚海海戦の教訓も生かさず、魚雷と爆弾がゴロゴロしている甲板に敵爆撃機の爆弾が落とされ、誘爆し、わずか5分間に4隻の空母が3隻まで沈没してしまうという、失態に至る。「運命の5分間」などときれいごとを言っても、実際には「間の抜けた5分間」に終わってしまった。……南雲はサイパンで戦死したが、草鹿と源田は、戦後まで生き伸びて、源田など自衛隊の航空幕僚長になり、さらに参議院議員になっている。草鹿は、他人が親切に示唆してくれた作戦を下衆（下司）の作戦だと決めつけ続けた。いかに「下衆の作戦」であろうと、日本艦隊はみじめな敗北を喫している。しかも誰一人として、ミッドウェイの敗北の責任をとらなかった。数百人のベテラン零戦パイロットを失い、米軍を活気づけた最大の「功労者」である。相手の心が折れそうな勝利には程遠い。しかも、ひどいことには、この敗戦を国民の目から隠すための緘口令だけは、しっかりとしたもので、淵田美津雄など、怒り狂っていた。

すでに書いたことだが、米国では高校生でもミッドウェイ海戦が転機になったことを知っている。日本の高校生はどうだろう？

さかのぼって、ハワイではどうか。山口少将も淵田も、第二次、三次攻撃の準備ができているのに、第一航空艦隊が北を目指して一目散に逃げている。戦果は、莫大なものがあると言いながら、実は旧式の戦艦を座礁させたのみで、肝腎の真珠湾の軍港施設には攻撃をしていないし、する気もなかった。奇襲なのに結構な被害が味方にもでている。そしてありもしない、(敵航空機は壊滅したという情報があるのに、50機が反抗してくる、と脅えて) 敵の反撃が怖くて、せっかくの勳章が台無しになるとばかりに、逃げだした。山口少将は、第二航空艦隊の司令官になったあと、発表された南雲、草鹿、源田には疑義があったが、一少将が口をはさめるものではない。単冠湾に集結しているときから、敵の燃料タンクやドック機能の破壊、すなわち軍港としての機能の破壊を具申していたが、一向に相手にされない。……これがあったから、ハワイで「二次攻撃を……」と言う具申がおざなりだった、という非難が生まれることになるが、すでに何を言っても通じないからである。ハワイを破壊しておけば、米艦隊はいちいち本土まで引

き返さなければならなくなり、日本からの距離と米本土からの距離が同じくらいになるから、作戦にも余裕ができていたはずである。まして空母が一隻もいなかったため、敵航空艦隊が温存されている。結果論になるが、ハワイ奇襲はどう見ても失敗だった。山本五十六自身が直率するべきだった。とどのつまりが、敵に戦術の変化を教えるような結果になってしまった。せめて港口を閉鎖でもしていればまだしも。敵将ニミッツまでもが、山口の作戦を推奨している。

ハワイでもミッドウェイでも山口少将の主張通りにしていれば、潜水艦の待ち伏せが、すでに空母群が通り過ぎたあとになるようなドジをふむことはなかったであろう。作戦参謀のミッドウェイに対する、あるいは米国軍の行動に対する警戒があまりにもいい加減で、慢心していたようにみえる。源田のように「鎧袖一触ですよ」などという意見がでてくる。さすがに山本五十六に窘められたけれど。このたびの闘いの主目的は敵空母の撃滅にある。だから魚雷を絶対はずしてはいけない。たとえ姿が見えなくとも必ず近くにいるはずだから、と山本が念を押したのに、阿呆が勝手に陸上攻撃用の爆弾に変更してしまい、空母が見えたらあわてて元に戻すという最悪の選択をした。

山本五十六は、驚天動地の作戦を考えていたらしいが、うまく運んだらの話で、すべてが順調にいかなければ山口多聞少将の第二航空艦隊だけでもやる、というのだから、山口の能力を知っていたのである。それなら、戦時の人事は年功序列ではいけないことがわかっていて、なぜ南雲を司令長官にしたのか。

山口多聞少将は、奮闘空しく、空母飛龍の沈没とともに運命をともにした。これをも非難する連中がいて、生きて再起をはかるべきだ、というのである。山口にしてみれば、責任をとった、というだろう。あるいは、このような人事、言ってみれば勝っても負けてもどちらでもいいや、という方法にはついていけなかったのかもしれない。生き永らえて戦うべきだというが、そのような人物は、常に責任逃れを考えていて、ろくな闘いをしないのがしばしばである。南雲や草鹿、源田をみればわかる。源田は航空参謀で、自分の立てた作戦がつねに採用されるのが心配になったこともあるようで、淵田にぼやいたこともある。しかし、大方の見方は、「源田は戦を知らない。」こんな程度の参謀の下で死んでいった兵士が気の毒である。陸軍の辻政信や、服部卓四郎、あるいは牟田口廉也みたいなもの。

ニミッツが山本機を撃墜するとき、より優れた提督になったら困るが、と部下にたずねたところ、即座に山口多聞の名がでて、ミッドウェイで戦死しているから、ということでゴーサインをだしたという。

のちに特攻の生みの親といわれる大西瀧治郎は、山口の同期生であるが、ある時、「山口の下なら働き甲斐がありそうだ」と呟いたという。

山口多聞は、米国と日本との違いについて、精神のあり方が異なっている。ゆとりの精神がある。しかも緊張過剰はないし、上層部と部下との間も横の繋がりで、日本は縦の関係が強すぎる、とも語っている。

ハワイもミッドウェイも航空艦隊同士の本格的な戦いになったのだが、これは世界初のことである。・・・もともと「空母」を世界で最初に開発したのは日本である。

東郷元帥に私淑するニミッツは、あるだけの艦を集めて祖国の危機に臨むだろう。

航空艦隊の超ベテラン大尉朝永丈市は地味だが、常に自分の聖旨にも無関心という豪傑肌の偉丈夫だった。一航艦の淵田美津雄中佐と双璧をなす、二航艦の侍大将というべきだろう。雷撃戦の神様と呼ばれたが、二人の部下とともに魚雷を抱いてヨークタウンに体当たりをして戦死した。

山口多聞少将は、ハワイでもミッドウェイでも不本意な戦いしかできなかった。この人の説に従っていれば、もう少しまともな戦いになったであろう。蘭印、オーストラリア、インド洋で抜群の働きを示し、戦死後、少将の武功としては異例の、功一級金鵄勲章を授与された。

山口が生きていれば、いずれ長官になって歴史の残る名長官になっただろうと言われるほどの大器だったが、山口少将が長官になるときは、日本はズタズタにされていただろう。

繰り返す。敗因は、敵の物量作戦であったが、人事のミスもかなりの部分を占めている。

山口多聞少将が、宇垣、福留、大西瀧治郎、草鹿少将あてに送付した具申書が遺っている。草鹿は、二言目には「下衆の策」と言ったが、この山口のさくには、触れていない。ケチのつけようがなかったのだろう。

「航空兵力を主体とする艦隊編制は1日も速やかに之を実施する要あり。」「私見として取り敢えず送付す」とある。英米を屈服させるための、奇想天外、驚天動地ともいうべき、世界史上最大の作戦洋平計画である。その要旨は、以下の通りである。

## 1. 海軍軍備方式

航空軍備（昭和 18 年度末までに）

〔飛行機〕

大型機 300 機

航続距離 6000 海里 最高速力 250 ノット

巡航速力 250 ノット 搭載爆弾 2 トン以上

（96 式、一式陸攻の 2 倍以上）

対米屈服戦に使用（米軍の B29 のようなもの）

中型機（現用機） 3000 機（96 式、一式陸攻級の中型爆撃機）

戦闘機遠戦型 300 機

零戦型 4000 機

両戦闘機の機数は航空戦に絶対優勢を保持するに足るもの（制空権を握る者が戦争に勝つという思想）

艦攻、艦爆 各 1000 機

敵の主なる艦艇と、攻略用艦船などを撃破するに足る兵力

水上偵察機 300 機

〔空母〕

蒼龍以上の物もの 12 隻

最高速力 32 ノット（役 59 キロ）、航続距離 18 ノット（約 33 キロ）で 15000 海里、対空兵装高角砲 20 門、大型機銃 40 門、搭載機は艦船 45 機、艦爆 27 機、艦攻 27 機、重防御 急速建造を行う。

〔その他基地設営隊、基地員、基地物件の急速運搬方式〕

艦艇造艦

潜水艦 300 隻

航続距離 15000 海里、行動日数 3 か月、300 隻

防空艦 50 隻

対空対潜兵器完備、航続力、最高速力など空母と同じ

護衛艦 100 隻

最高速力 20 ノット（約 37 キロ）、航続距離 12 ノットで 2000 海里、対潜兵器完備

## 2. 連合艦隊編制（省略）

## 3. 作戦洋平

作戦順序（省略）

各作戦の具体的要領

第二段作戦

5月（昭和17年）中旬までにインド要地（セイロン島、カルカッタ、ボンベイ）の攻略戦を完了す。7月末までにフィジー、サモア、ニューカレドニア、ニュージーランド、豪州を攻略す。なし得れば豪州は謀略をもって大東亜共栄圏に参加するように指導する。

#### 第三弾作戦第一期

8月ないし9月、アリューシャンを攻略、11月または12月、ミッドウェー、ジョンストン、パルミラを攻略、12月または翌年1月ハワイを攻略

#### 第三弾作戦第二期

ドイツと策応、南北米州を遮断する。第一艦隊（機動部隊）、第九艦隊（潜水部隊）を米国西岸に「起動させる。状況によりパナマ運河を破壊する。第一艦隊、第八艦隊（基地航空部隊）で北米西海岸要地を空襲する。南米要地に「ドイツと協力派兵して、これを枢軸陣営に投ぜしめ、米国の必要資源輸出を遮断する。状況によりカリフォルニア油田地帯を占領する。基地航空部隊をカリフォルニア州に進出させ、北米全域にわたり、都市と軍事施設を攻撃する」

これには山本五十六も驚いたろうが、アレキサンダー、ジンギスカン、ナポレオンも唸るような古今未曾有の巨大作戦計画だろう。

ただし、日本の国力や人員養成、陸海軍の意見の相違、海軍部内の意見の不統一、ドイツへの過信などなど、実現可能かどうか。しかし、山口少将の気宇壮大なアイデアを無視するところに、日本軍の限界があったのだろう。……もし実現していたら、と思えばワクワクするではないか。